

# 研究活動のグレーゾーン

人文・社会科学編 あらすじ

## ●論文指導 PIの助言

池田 直典 (57)  
南鷹大学大学院教育学研究科  
社会教育学専修 教授

佐々木 ひな子 (26)  
池田研 博士課程2年

山口 結理 (26)  
池田研 修士課程1年

フンタイラン  
王泰然 (25)  
池田研 博士課程1年

・4月。指導教官の池田直典教授から、論文の指導を受けていた佐々木ひな子は、内心焦っていた。

・取材先である学童保育所の都合と自身の体調不良により、予定していた投稿論文の作成が大幅に遅れていたからだ。前年、学会誌に初めて投稿した論文が、査読付き論文として掲載されたばかりか学会内で話題となり順調にスタートを切っていたが、期日までにもう1本査読付き論文掲載の実績をつくらなければ、目標としていた来年度の博士号取得が危うくなる。

・そんな佐々木の事情を知る池田教授は、研究プラン（新規のフィールド調査をせず、前年の査読論文をベースに自身の過去論文の調査データを使用して、新しい視点で分析し直した新規論文作成）を提案する。

・同日。池田教授に論文指導を受けた山口結理は、研究プランをほめられ喜んでいた。

・山口はもともと中学校教師だったが、理想と現実のギャップを感じ、退職して池田研の門をたたいた。子供たちの個性を伸ばすインクルーシブ教育を学び、やがては自身と同じように現場で苦しむ教師を支援する研究がしたいと思っている。

・同日。池田教授に論文指導を受けた王泰然は、教授から、「一番大切なことは単に生きることではなく 善く生きることである」という言葉を聞く。

・数日後。山口は池田教授の著書や論文集めに奔走していた。教授から、研究の参考に読むようすすめられていたからだ。山口は、理想を貫ける場を得てやる気に満ちあふれていた。

## ●データ管理

川村 大志 (24)  
池田研 修士課程2年

・一方、研究室では川村大志が自身の研究テーマである不登校経験者へのインタビューデータをフリーサイトにアップして、自動で文字起こしができることに欢喜していた。

・それを見かけた山口は、個人情報漏洩のリスクのある行為だと注意し、作業を止めさせる。

・川村は過去のインタビューデータが、実際の調査対象者の数と合わないことに気づく。

<p>●自己盗用の疑い</p>	<p>・数日かけて山口は池田教授の過去の著書や論文を読み込むが、同じデータや同じ論旨が引用なしに使いまわされていることに気づく。</p>
<p>●池田研定例ゼミ 王<sup>ワン</sup>の中間発表</p>	<p>・数日後。ミーティングルームでは池田研院生メンバーによる研究中間報告が行われる。王<sup>ワン</sup>の発表後、院生の研究が順調に進んでいることに満足した池田教授は、メンバーに論文をどんどん書くよう発破をかける。</p>
<p>●研究不正の疑い、どうする？ どうすべき？</p>	<p>・その夜。佐々木・山口・王<sup>ワン</sup>・川村の4人は居酒屋でささやかな交流会を開いた。山口は酔った勢いで、池田教授への疑念をメンバーに打ち明ける。山口は、ある決意をする。</p>
<p>●分岐点</p>	<p>・翌日、山口は池田教授に自己盗用の疑いを指摘する。しかし教授はこれを深刻に受け止める様子も見せず、山口は失望感を胸に教授室をあとにする。</p> <p>・それから数ヶ月後、佐々木は池田教授のアドバイスをもとに作成した論文を学術誌に投稿する。</p>
<p>●二重投稿の疑い</p>	<p>・7ヶ月後（12月）。佐々木のもとに、論文を投稿した学術誌の編集委員会からメールが届く。佐々木の論文に二重投稿の疑いがあるとの内容だった。</p> <p>・佐々木は池田教授に相談するが、教授から「新規性を説明すればいいだけ」と受け流される。</p>
<p>●不適切なオーサーシップ</p>	<p>・数日後。池田研定例ゼミにてメンバーによる研究中間報告が行われ、王<sup>ワン</sup>はお世話になった研究室メンバーに国内の学術誌に投稿する論文の共著者になってほしいと申し出る。</p> <p>・驚くメンバーは一様に断るが、池田教授だけはその申し出を受け入れる。</p> <p>・佐々木から自身の投稿論文がリジェクトされたことが報告される。</p> <p>・佐々木を励ましつつも、なおも院生たちに論文投稿の発破をかける池田教授に対し、山口はずっと考えていたことを口にする。</p>
<p>●池田教授のジレンマ</p>	<p>・1ヶ月後。池田教授の姿は、研究倫理セミナーの受講者たちのなかにあった。ふとセミナーの内容をメモする池田教授。</p> <p>・1年後。新しい年を迎えた池田研メンバーたちはそれぞれの道を進もうとしていた。</p> <p>・数日後。池田教授は教授室で1人、自身の過去論文のリストを見つめていた。</p>